

28PA-am142

抗がん剤治療における薬学的介入や医師からの相談内容に関する調査

○関 貴善¹, 金 素安¹, 下嶋 和代¹, 宮崎 招久¹ (¹順天堂大練馬病院薬)

【目的】近年、病院で勤務する薬剤師に求められる職能は幅広い。特にがん薬物治療においては多剤併用療法が主流で治療が行われており、新薬も絶えず開発されているため、適切な抗がん剤治療や支持療法が行われるよう、薬剤師による支援が多く求められるようになってきた。そこで、当院において病棟で勤務する薬剤師が薬学的介入や医師からの相談応需を行った症例のうち、抗がん剤治療に関する支援内容について調査を行ったので報告する。

【方法】当院において、2015年11月20日～2016年5月20日までの6ヶ月間に、薬剤師が病棟にて薬学的介入または相談応需を行った症例を、各自記録用紙に記載し、その内、抗がん剤治療に関わるものについての調査を行った。

【結果】6ヶ月間における集計総数は408件、その内抗がん剤治療に関わる件数は142件(相談応需の件数13件を含む)で約35%であった。薬学的介入の内容は、もっとも多かったもので抗がん剤治療による副作用対策の支援であり、そのほか、抗がん剤の減量、中止や休薬に関する提案が多かった。医師からの相談応需では、抗がん剤の減量や中止に関する相談や、抗がん剤アレルギーの対策についてや、免疫抑制剤服用中の患者が抗がん剤治療を並行して行ってよいか、などの相談があった。

【考察】集計件数とその内容から、当院における抗がん剤治療への薬剤師による介入や相談応需は、一定の成果をあげているといえる。しかしその内容は患者さんのQOLや予後に関わる場合も多く、また、より高度になってきていることから、今後、がん専門薬剤師や認定薬剤師のみならず業務に携わる薬剤師全員の知識の底上げが必要であり、介入の内容についても随時検証が必要と考えられた。